

函館とイザベラ・バード（3）

大野純子

はじめに

1878（明治11）年夏にイザベラ・バードが函館で会った人として、「函館とイザベラ・バード（1）」ではデニング、「同（2）」ではユースデン夫妻を主にとりあげた。引き続き本稿では英国最大の園芸商ヴィーチ商会派遣のプラントハンター、チャールズ・マリーズ（1851～1902）について述べる。バード著『日本奥地紀行』の引用にあたっては、金坂清則訳の完訳版1～4巻を用い、引用部分の巻数、ページは「完3－21」のように記した。原著は1880年ジョン・マレー社版の電子版を用いた。

1. バードが会った人—チャールズ・マリーズ

1.1 英国の植生とプラントハンター

英国は太古の気象条件により、ヨーロッパの中でも特に植生が単調で貧しかった。花も木も決まりきったものばかりで、特に冬の野外は極端に色彩がなかった。すでに17世紀から富裕層がヨーロッパ大陸に採集人（プラントハンター）を遣って花や草木を集めさせ、それを客に誇示し始めている。19世紀半ばには帝国ネットワークの拡大と交通機関の発達により、採集対象地域は飛躍的に広がった。また、経済的に台頭したミドルクラスの人々は自分たちの庭にも適応する新しい植物を望んだ。プラントハンターは王や貴族、または園芸関係組織の送り出しにより、世界各地へと旅立った。

1.2 新人プラントハンターC・マリーズ

1.2.1 プラントハンターになるまで

ヴィーチ商会は1840年から1877年までにすでに15人程度のプラントハンターを世界各地に送っており、ハンター育成のノウハウの蓄積もあった。プラントハンターを送り出すには本人の報酬はもとより、その数倍の経費がかかる。会社は慎重に人選をする必要があった。体力、精神力、植物の知識はもとより、性格、恋愛を含む現在の人間関係も重要である。自分の力ではどうにもならない事故について、あまりに悲観的な性格はプラントハンターに向いていなかった。誠実かどうか雇用者にとって見逃せない。彼らは会社の監視の目もなく長期間外国で過ごすので、たとえば大金を持ったまま行方をくらますことも可能だし、採集した植物をひそかにライバル組織に売ることもできる。雇用側は可能な限り、そんなことをしそうにない人物を選ぶ必要があった。

1877年にヴィーチ商会は今年送り出すプラントハンターを3人選んだ。その中で最も長期間の「日本と中国でのハンティング」担当に抜擢されたのがマリーズであった。彼は26歳で、靴職人の息子だった。10代の時、花屋と苗畑を持つ兄の下で働き始め、1876年、25歳の時にヴィーチ商会に移った。彼はすでに日本と中国の植物に興味を抱いており、会社と彼の間で「両国で針葉樹を中心にハンティングをする」という旅の目的が設定された。

針葉樹は当時の英国で強く求められていた。イングランドにもともと自生する針葉樹は厳密に言えばイチイのみであった。針葉樹は貴族が所有する広大な領地に森林を造るため、そこを通る馬車道の両側に壁を作るために大量に必要とされていた。公園や植物園も同様の理由で針葉樹を必要とした。19世紀半ばまでに北米からダグラスモミ（ダグラスはプラントハンターの名前）をはじめ、さまざまな針葉樹が持ち込まれていたが、貴族も園芸業者も新種の針葉樹を求めていた。ヴィーチ一族の一人であるJ・G・ヴィーチは1860（万延元）年に来日してニホンカラマツを持ち帰り、北日本は針葉樹の宝庫であると認識されるようになっていた。

マリーズが短い準備期間に何をしたかは不明だが、他のプラントハンターの例を見ると、会社は彼に標本の作成法、繁殖用の株の採集方法、ウォーディ

アンボックス¹⁾の使い方など実務的なことを教え、旅行中は日誌を書くこと、また、その写しを取って必ず一部を会社に送ることなどを要求しただろう。また、ベテランのプラントハンター、R・フォーチュンの“Yedo and Peking” (1863年 ジョン・マレー社)をはじめとする著作は、年代は多少遡るものの同様のプランを立てているマリーズにとって参考になったと思われる。

1.2.2 出発と3年間の旅の成果

マリーズは1877年2月1日にロンドンから香港に向かった。おそらく、フランスにさえ行ったことがない彼の初の海外旅行である。船の中は彼にとって非常に快適だったはずだ。英国船は帆走力と蒸気の力で当時としては世界一の快足を誇り、船の中はすべてが英国風であった。そして、寄港する港々には常に大英帝国の軍艦が投錨して航路の安全を守っていた。船酔いさえなければ、ロウアークラス出身者には本国にいるときより快適だったとすら言える。することもない船の中で彼は植物図鑑を見たり、フォーチュンの本を繰り返し読んでいただろう。

結果を先に述べれば、マリーズのこの旅は成功し、ヴィーチ商会にもおおいに利益をもたらした。彼は針葉樹以外にもキキョウの変種、ユリ、カエデなど多くの新種を持ち帰った。フォーチュンがどちらかという中国に重点を置いて回ったのと比較し、マリーズは日本を中心に活動し、「中国、日本」のハンティングを1セットとすると3年間にそれを3回繰り返した。

マリーズにとってこの旅は初めてのものなので、判断の誤りがあちこちにあってもしかたがない。ベテランのプラントハンターであっても、未知の国で限られた情報と通信・交通手段のために判断ミスをして、最悪の場合は命を失うこともある。マリーズの旅は採集物の点から見れば全体的に成功を収めたといえるものの、彼は中国では突出して珍しい植物を採集できたわけではない。日本でかなりの成果を得られたのは、北日本を精査して回ったプラントハンターのさきがけの一人であり、特に北海道を時間をかけて回った最初のハンターだったことによる。マリーズの行動はヴィーチ商会やベテランのハンターから見れば、首をかしげたくなるころもあった。

1.2.3 第1セットの中日の旅

第1セットの中国でのハンティングはごく短く、マリーズはすぐに日本に来た。彼は1877（明治10）年4月に、まず横浜でイトー²⁾を雇用し、共に陸路で北上した。青森ではオオシラビソ（アオモリトドマツ）の球果³⁾を採集した。これには後にマリーズの名を冠して *Abies mariesi* という学名がつけられた。彼らは採集物を胆振地方の幌泉から函館に行く船に載せた。これは荷物を軽くしたかったイトーの発案であろう。ところが昆布を載せていたこの船は事故で大破し、マリーズの採集物はすべて失われた。船員たちが必死で守った荷物は当然、高く売れる昆布のほうである。子どものおもちゃにするようなマツカサや、その辺の山のわけのわからぬ植物の苗や球根は、それでもいちおう小舟に移し替えられたものの、その舟はすぐに沈んでしまった。

マリーズはこの事故のニュースを北海道で聞いていながら、その場で同じものを採集することはできなかった。内地旅行免状も取り直さなくてはならないし、北日本のハンティングシーズンが終盤期に入っていたからだ。そして、都合の悪いことに、この1877（明治10）年夏は横浜函館間の定期船は西南戦争のために徴集され、運航されていなかったため、マリーズとイトーは結局12月まで函館で船を待ち、英国の軍艦に乗せてもらって新潟に着き、新潟からは陸路で東京に戻った。帰りの交通確保ができていないことが、新人プラントハンターらしい。時間を無駄にしないために、道内を回る前にまず函館の領事館で軍艦の寄港予定などを聞き、それに合わせてハンティングを切り上げなくてはならなかったはずだ。

1.2.4 第2セットの中日の旅

第2セットの中国での旅は、マリーズにとって辛い経験になった。彼と現地の使用人たちとの関係はひどく悪かった。よい関係なら情報は彼らが積極的に集めてくれるが、悪ければ何も教えてもらえない。マリーズの場合はそのみならず、収集物を何度も奪われたり、台無しにされるという暴力を受けた。彼は度重なるトラブルで疲弊したのか、重度の日射病にかかり2か月間病臥した。

マリーズの旅の約 25 年後に J・H・ヴィーチが著した“Hortus Veitchii”には、マリーズは「熱意はあったが、忍耐力が不足していた (p.84)」と記されている。中国でのマリーズは、忍耐力というよりも、適応力に欠けていたといったほうがよい。彼は日本ではイトーのみを雇用していたが、人口の多い国ではそれはしにくい。雇い主の意向とは別に使用人の人数は増えがちである。そのような時にはリーダー格の人間にある程度を任せ、彼のメンツが立つようにしてやり、叱責する時は他の使用人の目の前ではしないことが重要である。

マリーズの旅の約 30 年後に中国でハンティングをした E・H・ウィルソンはその点、優れていた。彼は常に交代要員も含め 30 名前後の使用人を雇っており、威厳をつけるため平地では輿に乗って移動した。山地では使用人は輿を解体し背負い、ウィルソンは歩いた。これらはすべて中国人リーダーの提案する方法に従ったためである。J・H・ヴィーチは、ウィルソンはたいていのことは中国人の言うなりになるが、時として頑ということを聞かないときもあったと、記している (Veitch, J.H [1906] 2015 p.96)。それに比してマリーズは常に頭ごなしに彼らに命令を下し、彼らのプライドを傷つけ、敵対関係を作り上げてしまったようだ。

病が癒えて中国から日本に戻ってきたマリーズは、横浜で当然イトーを再雇用するつもりでいたが、イトーはすでにバードと旅に出ていた。この第 2 セットの日本の旅で、マリーズは前回事故で失った採集物を再度集めなければならず、しかもイトーは見つからずで悲壮的でさえあっただろう。しかし、彼は果敢にも一人で北上し、前回の収穫物とほぼ同様の物を集めながら、バードらの到着前に函館に着いていた。

マリーズの日本での最大の失敗はイトーに固執するあまり、北日本の貴重な採集時期を取り逃したことである。フォーチュンなら、イトーがいくら有能な助手であってもここまで固執して日々を無駄にしなかつただろう。

1.3 マリーズ、バード、イトー三者の関係

1.3.1 函館で待つマリーズ

マリーズが函館でバードに会う前後、彼が暇をつぶすのにいかに苦労していたかを示すエピソードがある。彼は 8 月 6 日に函館近郊のじゆんさいぬま蓴菜沼で偶然、

東京帝国大学理学部教授の矢田部良吉に出会った。矢田部はマリーズと同年の27歳で、米コーネル大学で植物学を専攻して卒業した。彼はこのとき、E・S・モースらとともに北海道に調査旅行に来ていたのである。

鶴沼(1991)で活字化された矢田部の「北海道旅行日誌」(メモ帳原物は散逸)によると、マリーズは矢田部に貴重な戦利品ともいべきトドマツ、エゾマツの球果と、ヴィーチ商会の草木カタログを贈った。しかし、この球果は植物分類学を専門とする矢田部には見慣れたものであり、感心するはずがない。マリーズは矢田部との初対面の後、3回も行動を共にしている。9日には共にブラキストン宅を訪れ、12日には函館山を案内して一緒に土器を掘った。翌13日は七重勸業課試験場に同行している。同日誌によれば、マリーズは旅館に泊まっているとのことだが、9日のブラキストン宅訪問時に彼に勧められ、途中からブラキストンの家に移った可能性もある。函館を訪れる博物学関係の西洋人はよく彼の家に泊めてもらっていた。

一つ、奇妙なのはマリーズが前年に函館に来ていながら、ブラキストンを知らなかったと考えられる点である。第一セットの旅で彼を知っていれば、彼の斡旋により、しっかりした船に大事な収集品を積み込み、英国に早く輸送できただろう。第二セットの函館では、よんどころなく長逗留になりそうだった。宿泊費節約のために、そして何よりイトーの件について相談するために彼ほど頼れる人物はいないのである。ブラキストンにはいろいろな側面があったが、困っている西洋人、特に博物学関係の西洋人には喜んで手をさしのべていた。もし、それらの問題がなくても、彼のように誠実で植物に詳しく、庭を所有する現地居住の西洋人はプラントハンターには願ったり叶ったり存在であった。ベテランのハンターは現地に着くとすぐにこのような西洋人を探し、採集した苗を預けている。あるものは地植えし、しばらく養生させてから本国に送り出すのである。そうすると、苗が本国に着いた時に格段に状態がよかった。マリーズは全体的に現地の西洋人とのコミュニケーションが足りない印象がある。

1.3.2 なぜバードはマリーズをほめたたえたのか

イトーは、マリーズのことを新しい主人になるバードに完全に隠していた

わけではない。それどころか、植物採集旅行の従者兼通訳の経験は彼の大きなセールスポイントでもあったから、面接では、英国人プラントハンターマリーズ氏の東北、蝦夷の植物採集旅行に同行したと積極的に話した。イトーはバードと契約を結んで自分の身が安泰になった後、出発直前に「前の雇い主のマリーズ氏から、戻ってきてほしいと頼まれていたのですが、ある婦人と契約を結んでしまいました、と返答しました（完Ⅲ－39）」とバードに述べた。彼は自分に都合のよいことだけをバードの耳に入れ、マリーズと交わした契約内容のうち、「マリーズがイトーを必要とする時、イトーは月額7円の給料で働くという一文」についてはふれなかったのである。

バードから見ると、そのマリーズが、まるで待ち伏せをするかのように函館に先に来ていて、イトーの二重契約がここで露見した。バードはユースデンの立ち会いの下、マリーズとの話し合いの席に出た。これから函館を出発し、いよいよ日本旅行の大きな目的であるアイヌ調査に出かけるというのに、マリーズが強硬にイトーの契約不履行を主張すれば、彼女はここで有能な従者を失ってしまうことになる。

しかし、マリーズはヴィクトリア朝時代のモラルに従い、女性を困らせるようなことはしなかった。彼はでき得る限りの譲歩をして、バードとの合意の下にイトーを引き渡す期限の日を定めた。これでバードは予定通り、イトーを伴って平取^{びらとり}にアイヌ調査に行けることになった。

一方、すでに函館で無聊をかこっていた彼の待ち時間はさらに延長され、大事な北海道の短い夏をみすみすやり過ごすことになった。

マリーズはバードにこの譲歩を恩にきせる態度は取らなかったが、それでも如才なく自分の恩恵を意識させることは忘れなかった。彼はイトーについて「自分の所にやってきた当初は出来の悪い従者^{ボーイ}でしたが、短所のいくつかを直しましたから、貴女^{あなた}に対しても忠実に務めてきたことと思います（完Ⅲ－40）」と述べた。

バードは安心したのか「氏なら万事伊藤によいようにしてくださると思う（完Ⅲ－40）」と手放しのほめようである。また、平取から函館に戻り、イトーをマリーズに引き渡した直後にも「これから立派で男らしい主人の下に行くが、この人なら伊藤が立派になる手助けをしてくださるだろうし、範を

垂れもするだろう。それは私の本懐である(完Ⅲ－201)」と念を入れて再度、マリーズをほめたたえている。

イトーの雇用の件に関してバードの下手際はなかった。しかし、あえて言うなら彼女は人物証明書^{レファレンス}⁴⁾のないイトーについて聞くために、前の雇い主であるマリーズを探してもよかったが、しなかった。彼女は一刻も早く旅に出たかったのだ。イトーは、面接に来た他の3人の候補者より多少ましな英語を使えたとし、何より北海道に行ったことがあり、植物採集の経験さえある。バードにとってはこの場で望める最高の従者兼通訳の条件を備えていた。人物証明書がないことを問題にして、他の応募者を求めて再度面接をしてもあまりいい人材は見つかりそうにない。バードはそこでまた何日も無駄にすることを恐れたのである。

1.3.3 マリーズから見たバード

マリーズから見ると、この譲歩は東京、横浜で集めた情報を分析した上での冷静な判断である。一介のプラントハンターである自分と比べて、バードは「選ばれた旅人」である。この人物は東京の領事館に堂々と泊まれ、特別な旅行免状まで持っている。マリーズは函館に着いてまず英国領事館に行き、旅行免状の確認、書き換え等と、イトーに関する相談をしたと思われるが、領事館がバードの味方をするだろうとは充分予想できた。それにバードは旅行記を書くために旅行しているのだから、この件は必ずそこに記述されるだろう。正義が自分にあったとしても、イトーを奪うことによって、バードに「アイヌ調査の旅はマリーズ氏によってひどいものになった」と本に書かれてはたまらない。雇い主であるヴィーチ商会にも迷惑をかけることになる。また、後述するようにマリーズはイトーをどうしても中国に連れ出したかったため、現在、バードから月額12円という高給を得ている彼の機嫌を損ねることもしたくなかったのである。

1.3.4 イトーから見た二人の主人マリーズとバード

バードの旅行記にはこの面談後に当然、バードがイトーを叱ったり、イトーがマリーズとの契約内容について説明する場面が出てきそうだが、それはな

い。この件について、イトーがバードに謝ったのかどうかもわからない。その後、バードがイトーにいつものように給料を渡すとイトーのほうから「何かよくないことがありますか(完Ⅲ-40)」と尋ねてきた。バードは「マナーの点でいくつか改めるべきことがあります(同 p.40)」と答えた。マリーズとの一件も含んでいるのか否か、どちらともとれる書きぶりである。イトーは素直にバードの言葉を受け入れたが、最後に「宣教師のマナーを真似ただけですよ!(同 p.40)」と得意の反撃をしてきたので、やはりマリーズとの一件は「マナー」に含まれていなかったようだ。

しかし、イトーの側から見れば、彼の言い分もある。植物採集というマリーズの特種な旅は、季節が非常に重要である。マリーズは旅の計画は立てていたが、現地に行かなければわからないことも多い。前述のように特に第2セットの中国の旅の時は彼が病臥したため、計画はないも同然になった。当時の医療レベルではこのまま死亡する旅行者も珍しくないのである。

イトーはいつ再来日するかわからないマリーズを無給で待っているわけにはいかない。英語が多少できて、学歴も有力な紹介者もないから、西洋人の家の臨時雇いなど当面の仕事しかない。たとえ、マリーズから手紙で連絡があったとしても、再雇用されて給料をもらうまでの時間的なずれは大きい。すでに半年近く、マリーズはイトーを雇用していなかった。そのようなときにバードの従者募集のニュースをヘボン宅の使用人から聞いて、彼は渡りに船とばかり応募したのである。

イトーはバードと雇用契約書を交わした翌日に一か月分の給料の前払いを申し出た。この申し出はこの半年、イトーがマリーズからの連絡を待ちつつ、稼げない普通の仕事をしていたためかも知れない。イトーは絹の羽織袴もちゃんと持って旅行中、社会的地位のある人の通訳を務める際には自分の判断できちんと正装した⁵⁾ので、ずっと困窮していたわけではない。これからの長旅に出るにあたって万が一のことを考え、母親にある程度の金をあらかじめ渡したかったのであろう。または聡明な彼が早くもバードとの旅がマリーズとのそれとは性格が違うことを察知し、これまで所持していなかった羽織袴の購入費用にあてた可能性もある。

バードとの旅は、当時としては特別辛いものではない。イトーにとって楽

で楽しい経験も多かった。彼らはまず、日光で金谷善一郎宅の快適な部屋⁶⁾に長逗留した。長逗留となると、彼の体力的消耗は格段に少なくなる。そこで彼は近くの貸本屋で借りた本を夜半まで読む時間的余裕もあった。近年、往事のままに修復されたその部屋を見ると、そこは多分それまでにイトーが泊まった宿の部屋の中で一番立派だったろうと思われる。それに加えて彼は、新潟と函館でもずいぶん楽ができた。バードは両地で宣教師の家に泊まり、イトーは一人で旅籠に泊まった。バードの用はほとんどなく、彼は暇をもてあますほどであったろう。マリーズとの旅ではあり得なかったことである。

プラントハンターとの旅は、一般の旅よりずっと重労働が多い。行く先々で種子や球根、苗、株を入手するので荷物は重くなる一方だ。運搬人を雇う場合もその手配、管理は従者の役目である。また、植物採集のために崖を降りたり、木に登ったりとよけいな作業が増え、ケガも危険さくようも多い。また腊葉(押し葉)を作ったときは、最初のうちは毎晩何回も起きて乾燥紙を取り替えなければいけない。このようなとき、まず明かりを灯すことからして現代の人間には考えられない手間がある。まずマッチで行灯あるいはロウソクに火を灯し、薄暗がりの中で作業して、よく灯の始末をしてまた寝る。これを一晩に数回繰り返す。「草神父」のあだ名さえある在日宣教師フォーリ神父は心底から植物好きで、日本で採集したものを西洋人に売り、代価を教会の資金に回していた。彼は夜中に何度も起きて乾燥紙を替えるときに幸せを感じると述べている。しかし、特に植物好きではないイトーにとっては単に睡眠時間を削られるやっかいな仕事である。

この他にも、イトーにとってバードとの旅のほうがずっと快適だった理由がある。当時のプラントハンターはほとんどがワーキングクラスの出身である。このクラスの男性は海外に出ると非白人に対して傲慢な態度をとることが珍しくなかった。

福澤諭吉は1862(文久2)年に遣欧使節の随員として渡航した。船が香港に停泊し、船内に乗り込んで来た中国人商人から靴を買おうとしたところ、そばにいた英国人が突然、商人からその靴を奪い取って福澤に渡し、2ドル出させてそれを商人に投げつけ、杖で追い払った。福澤はそれを見て弱体化した国の国民がいかにあわれなものかを知ったという(白井1999p.118)。

この英国人は少なくともアッパー、またはアッパーミドルクラスではなからう。アッパークラスであれば、このように外国人に要らぬ口を出さないし、出したいのなら自分の使用人に言わせるはずだ。

もう一つ、生麦事件の痛ましい犠牲者である英国人 C.L. リチャードソンの例をあげる。彼は 25 歳頃に上海に出て、若いながらもかなりの成功を取っていた商人だった。F・ブルース中国駐在公使は、彼が罪のない現地の使用人に残酷な仕打ちをしたため、罰金を科す案件に関わった。ブルースは、東洋での一部の英国人の粗雑な振る舞いを「我が社会の傲慢な気風」と呼び、非難していた（チェックランド 1996 p.22）。

マリーズは東洋人に対して特別傲慢であったわけではない。イトーが函館で再びマリーズに再雇用されることをどう思っていたかはわからないが、彼はいやがって逃げ出したり、バードに救いを求めたりはしなかった。中国でトラブルの元になったマリーズの態度が日本に来て急によくなったとは考えられないが、イトーがだんだん有能であることがだんだんわかり、彼の態度がよいほうに変わったことはあり得る。

バードは横浜でイトーと初めて会ったときに、彼の表情について「こんなにぼうっとした表情の日本人には会ったことがなかったものの、時折すばやく盗み見るような目つきをすることからすると、ぼんやりしているように装っているようにも思われた(完Ⅲ-83~84)」と鋭い観察眼で記している。その表情は、彼がマリーズとの旅を経て、人を見下す西洋人に仕える際、不快なことからうまく逃げる方法を体得していたことを示しているのかもしれない。

1.3.5 イトーとバード双方向の教育

イトーの英語は机上で学んだものではなく、周りの西洋人から聞き取って覚えた英語なので、彼は言葉の品位の別を知らない。バードはたびたび「その言葉はよくないから、これを使いなさい」と教えてやった。イトーも熱心にそれをノートに書き留め、英語力の向上に努めた。バードが指摘するイトーの「悪い表現」は横浜のアメリカ人から学んだものもあるが、一番長い時間を共に過ごした西洋人はマリーズなのだから、彼から覚えたものも多々あつ

ただろう。

今までとは違う「主人バード」にイトーは期待を持ったようだ。旅を始めずか2週間ほどで、イトーはマリーズに対しては多分要求しなかったことを、バードには求めるようになった。バードはユーモアも交えて次のように書いている。

伊藤は私が立派な振る舞いをするを強く望んでいる。私も日本式に礼儀正しくありたい。また日本人の礼儀作法を絶対に踏みにじるまいと常に心を砕いているので、こうしてくださいとか、こんなことはなさらないようにという〔伊藤の〕意見をほとんどそのまま受け入れている。それで日一日と深くお辞儀するようになっている。(完I-202)

この態度のおかげで、バードは津川という所で宿の女将に「異人さんにしては礼儀正しい(完I-239)」とほめられた。もちろん、バードは大英帝国の臣民の共通認識として日本を「半未開の国」と考えていたが、すでに世界各地への旅行経験もあり、ヨーロッパ流が世界のすべての場所で通用するわけではないことを充分体得していた。そして故国で保持していた品位を、このようなちょっとした行動をすることで異国でも保ち続けたいと思っていた。これは表面的ではあるにしる、マリーズが心がけようと思ってもみなかった異文化尊重の態度である。

1.3.6 イトーの人生設計

マリーズはバードとの面談時に「イトーを中国に連れて行きたい」と話しているので、イトーも函館到着後、早い段階でそれを聞いたと思われる。その後、イトーが中国に同行したかどうかは定かではないものの、その形跡はあまりない。

マリーズとしては給料を多少増額してやれば、それで済むと簡単に考えていたのだろう。かつてフォーチュンが日本に連れてきた中国人の助手は片言の日本語ができるようになり、気配りができて愛想がよい性格であったため、現地の日本人の協力を仰ぐことができた。マリーズはその例を知り、イトーの交通費、宿泊費のコストを支払ってでも彼を連れ出し、中国人と自分の間に彼を介在させ、辛苦を軽減してもらいたいという願いがあった。だからこ

そマリーズは一か月半以上、函館でイトーを待ち続けていたのである。

ところが、イトーの思惑は違っており、マリーズの申し出を断った可能性が高い。その理由を推測すると二点上げられる。まず第一に彼が今の自分は「職業人生の道を歩み始める大切な時期」にいと気がついたと思われるからだ。イトーはバードとの旅を経て、専門の英語通訳ガイドになろうと決めていたと考えられる。バードは、イトーが筆まめで母親、友人に手紙を書くのはもとより、東京を発ってから会ったにすぎない日光の金谷善一郎にまで手紙を書くと記している（完Ⅲ－203）。確かにイトーは筆まめではあったようだが、金谷に手紙を書く理由は、西洋人が好む観光地である日光の宿のオーナーとこれからも関係を保ち⁷⁾、将来の布石にしたかったからだろう。そうなると、これからマリーズに従って海外に行き、日本を留守にするのは得策ではない。

推測理由の二点目は、イトーの家庭の事情である。彼が一人っ子かどうかは不明だが、父はすでに亡く、彼は母を養っている。外国に行って万が一のことがあると、母親は路頭に迷うことになる。日本にいても充分稼げそうな今の自分であり、危険な思いをして外国に渡る理由はまったくなかった。また、マリーズも当初はイトーを海外に連れて行くことは想定していなかっただろうから、契約書にそのことは書かれていなかっただろう。

金坂（2000）も同様にイトーは少なくとも長期にわたって中国や台湾に行かなかったと推測している（注 10 p.58）。金坂がその根拠としているのは 1946 年運輸省発行の『日本ホテル略史』である。1879（明治 12）年の項に、ガイド専業者組合「開誘社」が組織されたとあり、イトーは発起人の一人として名を連ねている。（p.16 月日の記載はなし）。マリーズは同年夏には中国から日本に戻っているの、イトーも共に帰国したが、その後の日本でのハンティングには同行しなかったとすれば、このような準備をする時間もあったかもしれない。しかし、この新しい試みはこの年の前半、彼が横浜にいて同業者と計らい、準備をしたからこそその結果であるとも考えられる。

バードは 9 月 14 日にイトーをマリーズに引き渡したのち、ヘボン夫妻と共に船で横浜への帰途についた。残った二人はいつまで行動を共にしたのだろうか。引き続き道内でのハンティングをする場合、イトーは従来の契約が

あるので断ることはしにくい。また、北海道にいる時に中国行き話を断ったとすると、マリーズは怒って、イトーの東京までの旅費を出さないで一人で帰ってしまう可能性もある。当時、日本の定期船の乗船代金は大変高く、庶民に出せる金額ではなかった。バードはここにマリーズが現れなければ、当然イトーと共に航路で横浜に戻ったはずである。バードがマリーズへのわびをかねて、イトーの船賃を全額、または一部出したとの仮定もできる。「イトーがいないために職務上大変な不便、遅滞があった」と語ったマリーズに、バードは自分の責任ではないとは言え、かなりの引け目を感じたと思われるからである。しかし、その場合でも船賃はイトーではなくマリーズに渡したであろうから、イトーとしてはここで本音を言うべきではなかった。イトーとしては表面上は従うように見せ、共に横浜に帰ってから「母が許してくれない」などの理由をつけて断るのが最善策である。若いイトーは今後は契約書の内容を熟慮した上でサインすることを学んだであろう。

1.4 マリーズの第3セットの中日の旅と帰国後

1.4.1 第3セットの中日の旅

マリーズは1878年12月に横浜から香港に向かい、揚子江を800マイル廻りながらハンティングを続けた。1879年夏に日本に戻っているが、この第3セットの中日のハンティングについては記録がごく少ない。彼は最終的に1880年2月に英国に帰国した。

1.4.2 マリーズの第二の人生

プラントハンターも例外なく引退する時が来る。仕事の性質上、それは早い。ほとんどのハンターは独身だったから、本国に戻るとまず結婚した。帰国後、植物園の要職に就くなどの出世を遂げた者もいた。成功したプラントハンターは本国では無口で控え目な傾向があり、出世を妬まれないように用心していた。しかし、それ以外の場合は難しい。彼は再び一人の園芸職人に戻り、わずかな給料で苗の世話や水やりを黙々とできるだろうか。

マリーズは帰国後は二度とプラントハンティングの旅に出ることはなかった。彼はまず、英国で自分の結婚を決めてからインドに渡って藩王の庭園の

責任者となり、家族とともにインドで生涯を送った。

おわりに

バードとマリーズの間でイトーの件の決着がついた時点で、少しは雑談も出ただろう。バードにとっては、この件さえ片付けば、後は貴重な出会いのチャンスだった。マリーズはバードより約20歳若い、なんといってもプロのプラントハンターである。英国の一般人はプラントハンターと話す機会などそうない。なぜなら、彼らはあまり国内にいないし、本国にいるときも人を集めて話を聞かせるような社会階層の一員ではないからだ。千載一遇のこのチャンスにバードはマリーズから、有名なヴィーチ商会の話、貴重な植物を見つけたときの話、港から植物を送る苦労などを聞けただろう。彼女のマリーズに対する最大のほめ言葉には、珍しい話を聞いた心の弾みも含まれているのかもしれない。

英国領事館からそれほど遠くない七面山の麓に「咬菜園」という場所があった。1857（安政4）年に名主堺新三郎が造った庭園で、命名は武田斐三郎による。全国から桜その他の名木名花を移植して石を配し、当時としては珍しいことに一般に開放されていた。海を見下ろす景勝の地で、杉浦誠、運上所の役人、榎本武揚ら、または道外からの文人もこの庭園を訪ねている。1876（明治9）年に寺島宗則、伊藤博文らが来道した際にはここを函館の宿泊所とした。しかし幕末以降、箱館戦争を経たり所有者が変わったりで、バード来函のこの時点では、すでに最盛期は過ぎ、人工的な庭園は多少荒れていたと思われる。

バードは東北・北海道の旅行に出る前に、東京で吹上御苑と浅草寺の庭を見て、庭師の技術の高さに驚いている。しかし、バードが最も感心するのは、自然の中にある状態の植物である。東京から日光まで雇った車夫たちがバードと別れる時に、わざわざ山に分け入ってツツジの小枝を折り取り、挨拶代わりに渡してくれた。彼女はまるでプラントハンターになったかのような気持しがしたのだろう、この気遣いを非常に喜んだ。ツツジは当時のプラント

ハンターが夢中になって採集した植物の一つであった。

バードは函館に長く滞在しても、デニングの宣教の様子を見たり、病院や懲役場の見学に時間を費やし、函館の自然を楽しむことはしていない。バードは旅の途上、数々の植物の名前を書き残しているが、ブラキストンの指摘にもあるようにそれらには誤記もある。東北・北海道の針葉樹には特に疎かったようである。それこそマリーズが特に語れる分野であった。一方、バードはマリーズの知らないアメリカ、オーストラリア、サンドウィッチ諸島（ハワイ）の植物を見てきた。彼らなら咬菜園の植物を見ながら、お互いに蘊蓄を傾けあって有益な散策ができたに違いない。

註

- 1) 英国人医師、植物学者のウォードが数年かけて開発したガラスをはめ込んだ木箱。植物の性質によって形は様々で、これに土と苗を入れて船で運搬をすると本国に到着しても生き残っている確率が飛躍的に高まった。
- 2) バードは『日本奥地紀行』の原著で彼のことを終始一貫して‘Itō’としか記していない。この人物が「伊藤鶴吉」であることを本格的に立証したのは金坂清則である。
- 3) 俗にいう「マツカサ」である。
- 4) 当時の英国の使用人にとっては非常に重要なもので、これを前の雇用主からもらえなければ新たに就職先を見つけることは難しかった。イトーの場合、マリーズとの契約はまだ継続していたので、マリーズが証明書を書くはずがない。
- 5) たとえば、バードが宿で医師の往診を受けた時、宿の主人と戸長が公式にバードの部屋を訪れた時、秋田病院の見学に行った時など。
- 6) 金谷家は当時外国人客のための民宿を営んでいた。後に「金谷カレッジイン」と名付けられた宿は現在「金谷ホテル歴史館」として一般公開されている。
- 7) 旅行会社は存在していなかったので、外国人の通訳ガイドは旅のルート、宿を決める実質的な決定権を持っていた。その際に宿と旅行者の両方か

ら手数料を取ることは、バードもたびたび記している。

参考文献

- 鵜沼わか 1991『モースの見た北海道』北海道出版企画センター
- 運輸省鐵道總局業務局觀光課 1946『日本ホテル略史』運輸省（奥付無、出版年ははしがきによる）
- 大野純子 2018「函館とイザベラ・バード（1）」『大正大学研究紀要』103
大正大学
- _____ 2019「函館とイザベラ・バード（2）」『大正大学研究紀要』104
大正大学
- 金坂清則 2000「イトー、すなわち伊藤鶴吉における資料と知見」『地域と環境』3 京都大学大学院人間・環境学研究科
- 金坂清則 2014『イザベラ・バードと日本の旅』平凡社
- 金谷真一 1954『ホテルと共に七捨五年』金谷ホテル
- コーツ、アリス、M [1969] 2007『プラントハンター東洋を駆ける日本と中国に植物を求めて』遠山茂樹訳八坂書房
- 申橋弘之 2017『金谷カテッジイン物語 日光金谷ホテル誕生秘話』文藝春秋企画出版
- 白井堯子 1999『福沢諭吉と宣教師たち 知られざる明治期の日英関係』未萊社
- 白幡洋三郎 1994『プラントハンター』講談社
- 須藤隆仙 1972『新訂函館散策案内』北海道史研究会
- チェックランド、オリヴァー 1996『明治日本とイギリス出会い・技術移転・ネットワークの形成』杉山忠平・玉置紀夫訳 法政大学出版局
- 遠山茂樹 2002『森と庭園の英国史』文藝春秋
- 中尾佐助 2012『花と木の文化史』岩波書店
- 野間晴雄 2009「東洋の植物を求めて植物園・プラントハンター・園芸家の文化交渉学」『東アジア文化交渉研究別冊』4 関西大学
- 函館市史編さん室 1990『函館市史通説編第2巻』函館市
- バード、イザベラ 2012『完訳日本奥地紀行』1 金坂清則訳注平凡社

- バード、イザベラ 2012 『完訳日本奥地紀行』3 金坂清則訳注平凡社
ブラキストン、トーマス [1883] 1979 『蝦夷地の中の日本』高倉新一郎
校訂 八木書店
ブラキストン、W. トーマス [1883] 2018 『<私家版>エゾの中の日本』
上野昌美訳 ベーマー会 (非売品)
ホイットル、テイラー 1983 『プラントハンター』白幡洋三郎・白幡悦子
訳 八坂書房
元木省吾 1972 『函館の履歴書』(非売品)
元木省吾 1987 『新編=函館町物語』玄洋社
茂木治 2010 「咬菜園」『資料函館西部地区Ⅱ山側部』出版社記載なし
Bird, Isabella L. 1880 “Unbeaten Tracks in Japan: An Account of Travels in
the Interior Including Visits to the Aborigines of Yezo and the Shrines
of Nikkô and Isé” vol. 1, 2 John Murray, London
Blakiston, Thomas W. 1883 “Japan in Yezo : a series of papers descriptive
of journeys undertaken in the Island of Yezo, at intervals between 1862
and 1882” Japan Gazette
Veitch, James Herbert [1906] 2015 “Hortus Veitchii: A History of the
Rise and Progress the Nurseries of Messrs. James Veitch and Sons,
Together with an Account of the Botanical Collectors and Hybridists
Employed by Them and a List of the Most Remarkable of Their
Introductions”Andesite Press